

密な青春の理由、聞いてきました!



特集

地元高校での青春は
みんなが主役!



「今」という時間をともに歩み、輝く

高校時代の3年間は、人生において特別な時間であり、ここでの学びや出会い、体験は自分自身を形成し、未来に大きな影響を与えます。

町内にある2つの高校。少子化という厳しい時代の中、平均志願倍率は0.3倍と定員を割り続けています。今回は、そんな地元高校に通う皆さんの、青春を少しのぞいてみましょう。



今、求められる特色ある学校づくり
「生徒数が少ない」「やりたい部活動がない」「環境を変えてみたい」...

町内の中学生が、地元高校に進学しない理由はさまざまです。時代とともに高校進学の見込みは多様化し、高校においても、特色ある学校づくりが求められています。

町も平成27年度より「四万十町高校応援大作戦」と題し、「町営塾じゆうく」の開設・運営や「高校魅力化コーディネーター」の配置など、生徒一人一人の夢や志が実現できる環境づくりに、学校・地域とともに取り組んでいます。

近年、進学面では国立大学や難関私立大学への合格、また就職面でも、希望就職先への採用など、自身の夢の実現に向け、主体性を持った生徒たちが、地元高校から未来へと羽ばたいています。

生徒も実感する「少人数」の魅力

町内にある2つの県立高校。窪川高校と四万十高校はともに、生徒数が100名に満たない小規模校です。だからこそ、「授業によっては先生とマンツーマンで、分かるまで教えてくれる」と生徒は話します。

むしろ、小規模校であることが魅力となっており、生徒一人一人が学校生活の中で主役として、友人や教員と深い関係を築きながら濃厚な時間を過ごしています。

取材に訪れたこの日、複数名の生徒が期末テストの後に残ってくれていました。その時、担当の先生が、お腹を空かせた生徒を気遣いパンを差し入れました。すぐに「いただきます!」と生徒。先生と談笑しながらパンをかじる光景が、まさに「少人数」の魅力のように感じました。

地域との関わりから 生徒に芽生える郷土愛

「高校魅力化コーディネーター」や「地域学校協働活動推進員」を配置して、両校では地域に開かれた学校づくりを進めています。

生徒自ら課題を設定し、解決に向けて取り組む地域課題研究や地域探究学習。その分野に精通する地域の方と触れ合い、熱い思いを聞けることは、生徒たちにとって大きな刺激となっています。「地域にはまだまだ知らない場所や文化があっておもしろい」と話すように、生徒にとっては故郷四万十町を見つめ直すきっかけとなり、少しずつ地元を愛する気持ちが芽生えているようです。

将来、生徒たちが町にUターンしたり、町の外からでも地元を応援してくれる人材へと成長することを期待せずにはいられません。

自分で決めた学校だから楽しい!

地元高校に進学しない理由がさまざまあるように、地元高校への進学を決意した理由も、またそれぞれにあります。

驚いたのは、自分の意思で高校を選択しているということ。一日体験入学などを通して、自身で授業や雰囲気を経験した上で、3年間の高校生活のイメージが持てた学校に入学しているのです。

学校生活が「楽しい!」と言い切れるのも、それなら納得できます。